

いま、語りつぐ

平和への願い VIII

「平和のつどい～講演と朗読と歌でつづる～」

公演記録



宝 塚 市

宝塚市教育委員会

いま、語りつぐ 平和への願い Ⅷ

「平和のつどい～講演と朗読と歌でつづる～」 公演記録

開催日時 : 平成23年(2011年)11月5日(土)
午後2時～3時45分
開催場所 : 宝塚市立文化施設 ソリオホール
参加 : 300人(満席)
主催 : 宝塚市・宝塚市教育委員会
協力 : 宝塚市平和事業検討委員会

【 出演 】

講演 : 作家・評論家 吉武輝子さん
朗読 : 俳優 高田敏江さん
歌 : 歌手 クミコさん

【 目次 】

はじめに	……………	1 頁
講演 「無傷で平和憲法を次世代に手渡すために」	……	2 頁
朗読 「夏の雲は忘れない」から	……………	8 頁
歌 「心の歌のコンサート」	……………	16 頁

はじめに

宝塚市では、平成元年（1989年）に非核平和都市宣言を行い、平成15年（2003年）には核兵器廃絶平和推進基本条例を施行し、その趣旨に基づき市民の皆様とともに様々な平和の催しを行ってまいります。

昨年、平成23年（2011年）は、例年の平和の催しに加え、11月5日に特別の催し「平和のつどい～講演と朗読と歌でつづる～」を開催し、作家・評論家の吉武輝子さん、俳優の高田敏江さん、歌手のクミコさんの出演で、心のこもった平和へのメッセージを届けていただきました。

ここにその「平和のつどい～講演と朗読と歌でつづる～」の内容を平和啓発冊子「いま、語りつぐ 平和への願い VIII」としてまとめました。

吉武輝子さんの退院直後とは思えないほどの平和への力強く熱い想いの講演、高田敏江さんの涙なくして聞けない手記や詩の朗読、クミコさんの心ふるえる歌「INORI～祈り～」のほか東日本大震災の経験を交えたトークなど貴重な平和のメッセージとなっています。

しかし、残念なことです。吉武輝子さんは、この講演5ヶ月後の今年、2012年4月17日、肺炎のため帰らぬ人となりました。吉武輝子さんのご冥福を心からお祈りするとともに、吉武さんにとって最後の講演となった宝塚での「平和のつどい～講演と朗読と歌でつづる～」の記録であるこの冊子を通し、吉武輝子さんをはじめ、高田敏江さん、クミコさんそれぞれの平和への熱い想いを胸に、今後も戦争や核兵器のない平和な社会の実現に努めてまいります。

平成24年（2012年）12月

宝 塚 市

講演 「無傷で平和憲法を次世代に手渡すために」

作家・評論家 吉武輝子さん



こんにちは吉武輝子です。あの、三日前まで入院してたので、酸素ボンベつけたまま許して下さい。

私がいただいたテーマは「無傷で平和憲法を次世代に手渡す」。これが私のテーマであり、私の祈りであり、願いである訳です。というのは、私は、昭和6年の7月に生まれました。その三月後の9月、満州事変が始まり、本当に怒濤のごとく日本は戦争へ向かって突っ走っていきました。

敗戦を迎えたのは14歳。ということは、私は平和を知らない少女として育ちました。昭和16年に尋常小学校が国民学校になり、もう本当に小国民づくりの教科書に中身がガラッと変わりました。それまでは、「咲いた 咲いた 桜が咲いた」、その教科書が「進め 進め 兵隊進め 木口小平は死んでもラッパを離しませんでした」、で、私は声が朗々としてるもんですから、このくだりになると必ず先生が、「吉武さん、そこを読んで下さい」。立ち上がった私は、「木口小平は死んでもラッパを離しませんでした」などと言ってる内に、本当に、心底、軍国少女になってたんですね。

その前までは、大学生は、4年間徴兵制度から猶予されていた。ところが、大人の兵隊たちが次々と亡くなって、若者が必要になってきた時に、ラジオで東条英機が何

て言ったかという、これからは12月いっぱい、近くの軍隊にみんな行けど、但し、理工科と医学部は除くと言ったんです。ということはみんな個人的にそれぞれ能力、才能があるのに、国に役立つか役立たないか、それによって死に追いやる。だから女々しいと言われていた音楽学校あるいは画学生たちがどの位たくさん死んでいったか分からないんですね。

で、ちょうど今でも思い出しますが、私、女学校の4年生位の時に、学徒出陣の関東の4万人位の学生が、ズボンにゲートル巻いて大行進をしたんです。

雨が降っていた。私は一生懸命スタンドで旗を振りました。その時に、兵隊たちの、学生たちの、雨の中に、ザクッ、ザクッ、ザクッ、ザクッと言って、その足音が今でも耳について離れませんでした。出征兵士を送るためにも旗を振り続けたんですね。

ところが、敗戦を迎えた時に、高良留美子さんという詩人が「兄弟を殺しに」というタイトルの詩の中で、女たちは旗を振ってはならなかったという一行を読んだ時に、私、今でも涙が出てくるけど、私、泣いて、泣いて、私本当に泣いたんです。旗を振ったお蔭で、生きたいと思う人たちを殺してしまった自分というものを、責めて、責めて、責めて。で、本当に怖いなあと思うの

は、むしろ男の戦争が終わったあとで、女の戦争が始まるっていうね。

私のうちは、東京の麻布にありましたが、焼けてしまったので、近くの親戚のうちに仮住まいをさせてもらったんです。すぐ近くに、首に、肩に、馬の首のマークをつけた第8騎兵隊の駐屯地があって、すぐ近くに青山墓地がありました。

で、今でも忘れませんが、日本の女性が男の人たちに交じって一票投じたのは、敗戦の翌年の4月10日なんですね。で、その女の人に参政権を与える時には反対派がいっぱいいた訳です。ところがこれを推進させる側は何て言ったかっていけば、今まで女は無能力者で、男の言いなりになっていたと。だから自分で選ぶなんてことはあり得ないし、まさか立候補させるなんていう男はいません。何事も変わりませんというて、それを通したんですね。ところが何とありがたいことに、87人の女の人が立候補して、何と39人の女の人が当選したんです。それは何故かといったら、貴族院がなくなりましたから、衆議院のためにたくさんの人たちを入れなければならないということで、何と言ったらいいのかな。中選挙区制でそして何人かは、一人ではなくて、たくさんの人を入れることができる仕組みになっていた訳。

5人の場合は1人、10人の場合は2人、10人以上の場合は3人。人間って不思議なことに、自分が選択するという余地があると、片っぱ女を入れれば、片っぱは男を入れる。片っぱは利害、片っぱは理想。片っぱは戦争ずき、片っぱは平和ずき。そうやって、今の小選挙区制のように選択ができないという、こういうやり方ではなかつ

たために、何とうれしいことに39人も女の人が当選をし、今の新しい憲法をつくる時に、彼女たちがどの位、女の権利について、もう力いっぱい意見を述べたか。それは、議会の資料を読むと本当にありがたい。女の人がいるからそれが通ったんだなあっていうね。改めてありがとうね、という思いがあるんですけどね。

うちの母たちは、もう女は無能力者だ、無能力者だと言われて育った世代の人だから、一票、一票、一票というのを、飢えの時代だから、おいもの一俵と間違えていた訳ね。それが要するに一票と聞いたら、もうそれはがっかりして。ところが私なんかはその一票が女が人間であるということの証しであるというふうに思ってたもんで、もう嫌がる母を近所の小学校の投票所に引っ張って、引っ張って、引っ張って連れて行った訳です。そしたら、同じ思いを持っている仲間がいっぱいまして、もう学校の校門には女の子たちがいっぱい、いっぱい、いっぱい集まっていて、私はその校門に入ったすぐ左の、春らんまんの桜の木に寄りかかりながら、男の人の中に交じって初めて一票を投票する私たちの先輩を見ていたら、無能力者だ、馬鹿だ、無能力者だ、馬鹿だと言われ続けてきた、そういう彼女たちは男の人の間に交じって、トボトボ、トボトボ、トボトボ歩いているのね。で、私ね、本当にその時心から祈ったんです。どうかお母さんたち、先輩、次の世代のために胸張って歩いてちょうだい。そう思った時に、ああ、母が歩いているこの道の向こうに母たちと違う生き方があるんだと思ったら、何か急に涙がぶわーっと出てきた。



その翌日のことなんです。戦争は怖い。要するにうちの娘たちは、小学校の5, 6年でみんな初潮を迎えてるのに、戦争という飢えと、それからストレス、そのために14歳になった私も生理がなかったんです。初めて生理があったのは18歳の時なのね。で、回覧板が回ってきて、青山墓地は女の人が性的被害を受けやすいと、だから絶対に一人で行かないようにという。ところが私は今言ったみたいに、自分が生理がないから自分は大人の女だとは思えなかった訳です。そういう悲劇は大人の女の悲劇であって、私には関係がないと。で、一回り小さい弟が、「てこ姉ちゃん、てこ姉ちゃん、お母さんやお姉さんたちのために桜のレイを取りに行こうよ」って私を誘ったんです。で、糸に針を通して箱に入れて、弟の手を引いて私は青山墓地まで出かけて行ったんです。今でもね、本当に吐息ひとつで花が散ってくるような、もう暴力とは無関係な静かな静かな春のひとつきだったのね。

で、私と弟は両手を広げて、花びらを持って、それを拾っちゃあ針に刺し、それを拾っちゃあ針に刺し、これはお母さん、これはお姉さん。で、作ってる最中に、すごい勢いで弟が泣いたんです。絶叫したん

です。慌てて振り返ったら、何と5人の第8騎兵隊の駐屯地の兵隊たちが立っていて、その真ん中の一人が弟を抱き上げていたんです。これは弟をおいて逃げる訳にはいきませんでした。

でも私ね、神様というのは本当に辛いことはうまく忘れさせてくれるんだなと思うんですけどね。どんなにその時に苦しかったか、その時にどんなに痛かったか、そういうことは全然忘れていて、ただ仰向いた時の春の白い雲と、それから裸になっている体にふりそそぐ桜の花の花びらの冷たさ、それだけが感覚として残っているのね。

本当に昔の育ちをした私はもうそういうふうになったら好きな人とは結婚する資格はない。誰かを愛する資格はない。本当にそう思い込んで、二度自殺を試み、二度未遂で終わったんです。そしてね、二回目の時に近くの交番のおまわりさん、もう定年間近な方が、心配で来たんでしょね。私に言ったんです。「お嬢ちゃん、何があったか知らないけれど、人間というのは何があったかではなくて、これから先どう生きていくか。それによって人間の価値が決まるんだよ」って言った訳。私はそんな時に、本当にね、それを両親やあるいは学校の先生がひとこと言ってくれたら、どれだけ救われたか。でもやっぱり、苦しくて、苦しくて、苦しくて。

で、私が初潮を迎えたのは18歳の時だったんです。その初潮の赤い血を見ながら、私しみじみ思ったのは、私が奪われたのは肉体ではないと、よりよく生きようとする意思を奪われたんだということをしみじみ思ったのね。というのは、うちの母たちも結果として、いい結婚生活とは見えなかつ

たけど、でもやっぱり初潮を迎えた時に、ああ幸せな結婚をしたいという思いを抱いたのではなかろうか。で、その時に私は、自分の母方の祖母に呼ばれて泊まりに行ったのね。優しい、本当にお雛様みたいに華奢な女の人だったんです。で、私がああ、湯舟の横っちょで顔洗ってたら、おばあちゃまが湯舟から出てきて、ふっと足を広げた時に、その華奢な体とは信じられない位、女の局部が紫色に腫れ上がっていたんです。私思わず「ええー」と声を上げたら、彼女が私に何て言ったかっていえば、「輝子さん、これはおじいちゃんがやったのよ」と。要するに、花柳界で遊んで性病をうつして、うつして、それでこうなったんだと言われた時に、やっぱり女の人が人間として、きちっと生きることができなければ、たとえ結婚生活でもレイプと同じような性があるんだっていうことに気づかされたのね。

それと同時に私は、その時に私を犯した5人のアメリカ兵たち、どうしてるんだろうかって考えたんです。その時にハッと思ったのが、多分その人たちは国に帰って、いい市民として。で、自分の娘がそういうことがあったら、もうそれこそ銃を持って飛んでいく。かつて東京で一人の少女をみんなで乱暴したという、その記憶さえないんじゃないかっていうね。思った時に私、心から怒りが出てきて、こいつらのために自分の人生を棒にふるってたまるものかと思う訳です。

そして、しばらく経ったらウーマンリブ運動が出てきて、そして女の性の解放を盛んに叫ぶようになったのね。その時に私、しみじみ考えて、その性暴力、それは男と女の対立問題ではなくて、当時、男の人も

気の毒なことに、女のことを無能力者扱いしながらも、赤紙1枚で死んでいかなければならなかったのね。それから軍隊というところは、暴力を養成する場所だったから、男の人権が徹底して踏みにじられていた。それを上に向かって怒りを振りかざすのではなくて、弱い無能力者として、法的に規定した女に怒りをぶつけている。その象徴が性暴力だって気がついた時に、私思ったんです。

これからは、本当に男の人も女の人も自分の人権が守られるような、そういう社会を作っていかなければ、性暴力は決して、決して、決してなくなることはない、男と女の人権の問題であるということに気づいたときから、私は女性解放運動、人権運動そして平和運動、もう本当に全力を上げ始めたのね。

というのは、本当に考えたら、今の日本はとても、とても、怖い時代になってきているんです。気がつかないかも知れないけれど、憲法の改悪の路線が強くなってきている。それから、仮想敵国を作って若い人たち、盛んにあおり立てている。こういう時代だから私たち先輩は、無傷で平和憲法を次世代に手渡すために全力を上げていく。それは大人たちの義務なのではないかと私は思うのです。

私はね、本当にさっき申し上げたけど、戦争を知らない少女として育ったその背景には、教育問題が大きく介在しているのね。だから私は今は、教科書問題に全力で取り組んでいるんです。というのは、今までの戦争の実態を消してしまうような、そういう歴史の本がもうどこの市でも、どこの区でも使われ始めている。それを許してしま

ったら、また次の世代が同じことの繰り返しをしていくのではないか。そのことを恐れて、私は今、全力を上げて教科書問題にも取り組んでいるんです。

みなさん方、考えてください。本当に人生50年から人生100年。私たちは祝いの人生を生きるようになったのね。私は、今年80になりました。80になると本当に気がつかないけれど、今まで人生50年時代にはなかった、色んな病気が出てくるんです。80代になると3人に1人が大腸ガンになるというね。こういう私たちが、何倍も、何倍も、何倍も、何倍もたくさん生きる時代になればなる程、これは、平和であるということ、基本になれば私たちそのものの命を守っていくことはできない。それだけではない。今、本当に気の毒なことに、若い人たちが半分以上が非正規の勤め方をさせられているんです。非正規っていうのはいつでも首になってしまうというね。非正規だったら好きな人と結婚をして、そして子どもを産んで、そしてまともに生きていけば、そこそこの老いの時代を得ることができる、こういう機会を私たち大人は奪ってしまっているということ。このことをどうか、みなさん方もう一回、自分の生き方を振り返って次の世代に何を残そうとしているのか、そのことを考えてほしいなあと思うのね。

実をいうと、私は63歳から70歳まで中央大学の法学部の学生たちに女性学、前期13回を教えていたんです。で、学生たちは、本当に手をあげてものを言わせようとすると誰も口をつぐんで意見を言おうとはしないのね。そうすると、今の若い人たちはというふうに、今の大人は言い出すけ

ど、そうじゃないんです。偏差値教育というのは、人と違ったところがあってはいけないという。だから立ち上がって自分が言ったことが他人と違うということが分かったら、その人たちは生きられない。だから、レポートを書かせると、本当に、裏、表びっしり書くんですね。だから、私は、偏差値教育を許しながら、今時の若者とはいう大人の優しさのなさっていうものを、自分を、非常に責めたんです。で、共通して言えることは、この若い人たちの、この毛穴から何ともいえない孤独がにじみ出てるのね。私そういうのって気になるもので、学生たちとお茶を飲んだり、ご飯を食べたりしながら、どうしてこの若者たちの、この毛穴からこんなに孤独がにじみ出てるんだろうと考えて、考えてようやく分かったのはね。気の毒なことに、ほとんどの学生が現代史を学んでないんです。ほとんどみんな明治維新どまりなのね。人間というのは、ワン・ツー・スリーと一緒に生まれる訳ではない訳だから、あとで生まれた人は生まれなかった前は闇なんですよ。だけど、現代史を学ぶことによって自分がどの場所に置かれているか、現在地点が分かる。現在地点が分かるから、だからこういうふうな未来へ向かって生きようという、未来志向を持つことができるのね。

で、子どもたちと話をしているうちに、ああこの孤独は現在地を知ることのできる現代史を学ぶことを許されない、だから未来志向を奪われていることの孤独なんだということに気がついた時から、私は現代史の語り部になることに、もう決意したのね。

さっき言ったように、何年生まれで、どういう形で自分が軍国少女になっていった

か。それからまた、性暴力がどんなに私を傷つけ、今もなお、やっぱりどこかで、男の人を怖がっている自分というのがあるのね。で、そんな話を、ポツリ、ポツリ、ポツリ、つまり現代史の語り部になることに徹した訳ですよ。

そうしたらねえ、私、スマップの木村拓哉ことキムタクが大好きなの。そしたらねえ、キムタクそっくりのね、学生がすー、すー、すーとそばへ来て、「先生、先生」って、私に言うのよ。私はもう、とっておきの声を出して、「なーに」って言った訳。そうしたらねえ、無礼なのよ。「先生、昭和6年生まれ。うちのおばあちゃんと同じだ」って言ったんです。その時の私は、もう一回気がついたのは、この若い人たちの闇が埋まることがなければ、結局孤独であり続けるのは、私自身ではないかっていうね。何としてもこの孤独を埋めるため、何としても私は現代史の語り部になり続けたい、そういうふうになり、それをいまだに実行しているんです。

みなさん方、心からお願いします。次の世代にどんな社会を残していくか、それは大人の義務であり、責任である。で、憲法を無傷で次世代へ手渡していくためには、どうしてもお仲間が必要なんです。みなさん、お仲間になって下さいますか。

(拍手)

ありがとう。本当にありがとう。若い人たちが同じ轍を踏ませないように、どうかみなさん、私たちのお仲間になって下さい。もう一度お願いします。なって下さいますか。

(拍手)

ありがとう。本当にありがとう。私の話
はこれでお終いにしたいと思います。

ありがとうございました。

(拍手)



ソリオホールで講演する吉武輝子さん

吉武輝子さん プロフィール

1931年兵庫県のお生まれ。慶應義塾大学
仏文科を卒業後、東映に入社。東映では女性初
の宣伝プロデューサーとして活躍。1966年
に東映を退社後文筆活動に入る。

著書には、女性問題、生と死、老い、平和を
テーマに「女人吉屋信子」「置き去りーサハリン
残留日本女性たちの六十年」「おんなたちの運動
史ーわたくしの生きた戦後」「病みながら老いる
時代を生きる」「夫と妻の定年人生学」「老いて
は子に逆らうー私の『老親』修行」「死ぬまで幸
福でいるための12カ条」「万病息災ー病んでも
老いても『元気』でいるコツ」「(戦争の世紀)
を超えてーわたくしが生きた昭和の時代」ほか
多数。

また、女性問題、生と死、老いのほか、平和
をテーマに全国各地で講演。

2012年4月17日肺炎のため永眠。

享年80歳。

朗読 「夏の雲は忘れない」から

俳優 高田敏江さん



どうもみなさん、こんにちは。 ……高田敏江さん朗読……

「子供たちと私」 新木照子さん手記

山里小学校 それが、私が引き揚げてきて、赴任の辞令を受けた学校だった。

わずかの数の子供たちが跳ねまわっている。

この大きな学校に、たったこれだけの生徒

原子雲の下に生き残ったのは、これっぽっちだったのか！……

まる一年、授業がうけられなかったこの子供たちは、いまそれを取り返そうと、目を光らして勉強している。

身にまとっているのは、ぼろぼろの夏服だが、ほっぺたは赤く、つやつやしている。こんな廃墟の中にありながら、子供たちは、明るくほがらかであった。

それは、国語の時間だった。「五人の子ども」という題のこの教材は、父母の愛情と指導によって、すくすく伸びゆく子供らの姿が描かれている。

この時間には、楽しい気分をたっぷり味あわせようと、授業をすすめた。

「……五人の子どもの名は？」

「ピータ」

「ジュテ」

などと答えるのを、声に従って黒板に書いてゆき、そのおしまいに、

「お父さん」

「お母さん」

と並べて書いた、その時……

「先生……その五人の子供らは、^{しあわせ}幸福ネエ……」

言ったのは、一番前列の女の子。大きな声ではなかった。ごく、自然に口からもれた言葉であった。

ハッとした。

この子には、お父さんもお母さんもなかったのだ。私は生徒の方へ向き直り、見わたした。

黒板の「お父さん」「お母さん」の字をチラッと見てうつむく子

窓の外的一点を見つめて、瞳を黒板に向けない子

下くちびるをかんで、目をうつろに見開いている子

えんぴつを固くにぎりしめて、ノートが真っ黒くなるまで、ゴシゴシゴシゴシ塗り始めた子

この子らは……

みんな孤児だった。

あの時、あの火に、お父さん、お母さんを、奪いとられた子らであった。

私は息がとまりそうに苦しくなってきた。

この子らは、この教科書の「五人の子ども」の楽しい家庭生活に、とけこむことができない。それは夢の世界。この子らにとっては、しょせん味わうことのない、あこがれの生活である。

「先生。……先生のお父さん生きとるト？」

「……ええ、元気ですよ」

「先生。……お母さんも？……」

「……ええ……」

「ヨカネエー」

「……」

私には、もう授業を続けることができなくなった。

生徒たちは運動場へとび出して、明るい叫びをあげながら遊んでいる。あの子供たちの心の底に、あんな深い、大きな嘆きが潜んでいると、だれが感づくであろうか？この孤児たちは、少しも孤児らしく見えない。

音楽の時間

この学校にはピアノがない。オルガンが二つあるが、完全なのは一つだけ。

いざひき始めてみると、片方の空気袋が破れていて、踏むたびに、バサッ、バサッと音をたてる。

「先生、おかしか音のするネ」

「こわれとるト？」

「いっちょんきこえんバイ、先生」

「原子でこわれたトジャロ」

この子供たちに、音楽を、うんと楽しませてやりたい。

私は先にたって歌い出した。あまり得意ではないから、冷や汗が出る。

それでも、子供たちは無邪気に、私の声について歌い出した。ほんとうに楽しそうだ。いつしか冷や汗は、あつい汗に変わっていった。みんな歌っている。

口を大きく開けて。目をかがやかして。足びょうしをとって、両手をにぎりしめ、心一つにして歌っている。力づよく、明るく、ほがらかに……

永井隆編『原子雲の下に生きて～長崎の子供らの手記』サンパウロ発行

新木照子 手記 【子供たちと私】

… … … … … … … … … … …

「星は見ている」 藤野としえさん手記

あの子、博久は、幼少の時から

ちょっと変わった面白い子供でした。広島一中に転校しまして間もない頃、「僕の先生は詩吟が上手だから、僕も一席やって御覧に入れます。笑っちゃ駄目よ」と申して、それはそれは可笑しい節まわしで、浪曲とも詩吟ともつかぬことを申し、皆々吹き出したこともございました。

私が食事の後始末をしていたら、二階から「お母さん、ちょっときんさい」と呼びます。どこねとたずねますと「ここよ、屋根の上よ、滑りこけぬようにしなさい」と申しましたので、私は四ツん這いになって屋根に渡りました。「座布団を敷いておいたよ。お母さん」、「有難う有難う。なんと素晴らしい星空でしょうか、綺麗だね、戦争があつてみたいでないわね」と申しましたら、「お母さん、オリオン星座知ってる？ あそこよ、あそこよ」と指さすのです。そして「ねエお母さん、どうして戦争なんか起きるのでしょうか、止めてほしいなあ、日本にない物はアメリカから送って貰い、フィリピンにない物は日本から送ってやり、世界が仲よくいかんものかしら。そしたら世界が一つの国家になって、世界国亜細亜州日本町広島村になるね」と申して、なかなか話は尽きませんでした。

明けて、六日は上々のお天気でした。八月の太陽は目がくらむように暑く、あら、B29ではないかしらと空を見上げたとき、ピカリと世間が真黄色になり、天地も崩れんばか

りの大音響に、ハッと思うたまでは覚えていますが、その時、私は気を失ってしまいました。

我に返った私は、壁土の中に埋まっていました。埃で目も開けられず、明るい方角へ這い出しました。「ああ助かった、助かった」と見れば、家は半壊して二階が落ち、柱がぐしゃぐしゃになっていました。一体これは何事だろうか。主人は、博久は、どうして遁れているだろうかと思うと、胸が切なくなりました。

まわりは水を求める人たちばかりでした。私は小さな茶碗を拾うて来て、何べんも何べんも水汲みに行きました。ほんとうにこれこそこの世の地獄と申すものでございましょう。主人や子供のことを思うと息の根も止まりそうでございました。

その夜、丘の上から眺めますと、広島が一つの火の柱に見えて、月を焦がしているようでした。夜通し呻いていた人たちは、東の空の白む頃は静かになりました。

靴の音が近づいて来ました。そして防空壕の前にびたりと止まりました。誰だろうと起き上がりましたら、主人です。主人が中をのぞいていました。

よかったね、よかったねと喜び合い、男の子は足が早いから遠方へ逃げたんだろう、明日には元気な姿を見せるだろうと主人が申すものですから、私は急に元気が出ました。

明けて八日も朝から照りつづき博久を探しに出かけた主人が帰ってきて、「駄目らしいよ、爆心地らしい」と言うのです。私は気も狂いそうでした。声をあげて泣きました。

前の夜、博久はどうしてあんなに星のことをいい出したのだろう。私の胸には、博久の一つ一つの言葉が、痛いほどの思いで迫ってきました。

それから幾日か経ちました。今日は八月の何日だろうかと考えながら、ぼんやり町を歩いていましたら、通りがかりの兵隊から、日本降伏のことを聞きました。兵隊も学生もみんな泣いていました。私は気分が悪くなって来ました。降伏するつもりなら広島をこのようなことにせぬ前に止めてくれたらよかったのにと、残念で残念でたまりません。私は壕に帰って莖をかぶって泣きました。泣いて泣いて涙の乾いた頃、思い出されるのは、「戦争を止めてほしい」と言ったあの子の言葉でした。

それから、きまって夜空を見上げるようになった私には、博久も、博久と一緒に死んでいった一中のお友達も、そしてあの日亡くなられた多くの広島の人々も、みんなその魂が天に昇り、星くずとなって、この地上に再びあのような惨禍が起きないようにと、夜毎、静かに私たちを見つめているように思われます。

そして、あの子が申した理想が一日も早く実現しますように、私は長生きして見届け、あの世への土産にしたいと思うのであります。

この涙 人には見せじ 星祭る

「タカちゃんが死んだ日」 平野伸人さん手記

夏のじりじりした日ざしが照りはじめる七月になると、私は決まって幼なじみのタカちゃんのことを思い出します。

タカちゃんは十六歳の夏、白血病で死んでしまいました。

原爆が投下された日、タカちゃんの父親祐次さんは長崎市の爆心地から三・五キロの高台にある自宅にいました。特に身体の調子が悪くなることもなく元気に過ごしてきました。

タカちゃんは終戦の翌年九月に生まれました。私はタカちゃんとは幼なじみで、小学校も中学校もずっと同じでした。タカちゃんはとても明るく元気のよい少年でした。

高校二年のある日、まったく突然にタカちゃんの身体に変調が現れたのです。体育の時間の途中で、タカちゃんは頭痛とめまいがして学校を早退し、近所の病院にかかりましたが、あまりに貧血がひどいので、総合病院へ行くように紹介されました。

そして「再生不良性白血病にほぼ間違いない」と、あと二週間のいのちを言い渡されたのです。

本人は思ったよりも元気で、「体の悪か血ば少し入れかえんばいかん。一週間ぐらい学校を休んだら出てくるけん」と言っていました。

しかし、とうとう、タカちゃんが、病院から出ることはありませんでした。白血病と診断され、病状は確実に進行しました。

皮膚や身体中の毛細血管から少しずつ出血するのです。四週間ほどで、舌の感覚がマヒして、食べ物食べられなくなり、言葉もはっきり聞きとれなくなってきました。

「生きたい」

もう、口もきけなくなったタカちゃんの目がそう訴えていました。生への執念と家族の献身的な介護が二週間の死の宣告を伸ばしていったのです。

しかし、やがて目がかすんで見えなくなってきました。眼底出血が始まったのです。

そんなタカちゃんが私に「会いたい」と言ったのは、死の三日前のことでした。タカちゃんは、やせ細り、出血のためはん点のにじむ腕をそっと私にさし出しました。私は、タカちゃんの腕をじっと握りしめることしかできませんでした。

「原爆のせいじゃ」

そう言ったきり、お父さんは黙ってしまいました。

タカちゃんが死んで一年がたちました。

私たちは、久しぶりに集まった同級生の気安さに、タカちゃんの家で思い出話に花を咲かせていました。

夜も更け、そろそろタカちゃんの家をおいとまする時刻になった時のことでした。それまで私たちの話をニコニコと聞いていたタカちゃんのお母さんが急に顔をこわばらせ、切り出したのです。

「今日はみなさんにこんなにしていただけて、孝光もさぞかし喜んでいることでしょう。本当にありがとう」

「でも、もう、みなさんと会うのは、今夜で最後にしたいのです」

私たちは、タカちゃんのお母さんの申し出に息をのみました。

「みなさんが来てくれるのはうれしいのです。孝光のことを話してくれるのも本当にうれしいのです。でも、私たちはこれからも生きてゆかなければなりません。孝光には、兄がいます。妹もいます。孝光が死んだのは原爆のせいだと思います。孝光の兄も妹もこれからは原爆を背負って生きてゆかなければなりません。そうしたら、就職するときも、結婚するときも、きっと孝光から離れられなくなります。ですから、今日を限りにみなさんとはもう会いません。わかってください」

タカちゃんのお母さんと会ったのはこの夜が最後になりました。

これは、私が「被爆二世」であることを意識した最初の出来事でした。

タカちゃんの家で同じような被爆体験を持つ私の母は、私に被爆体験を語ってくれることはありませんでした。きっと、私を生もうとした時、悩んだに違いありません。

タカちゃんのお母さんもきっとそうだったんでしょう。

私は今、与えられた命を精一杯生きようと思っています。生きたくても生きられなかったタカちゃんのみまで、二人分の命を生きようと思うのです。

... ..

私は、毎夏、今年で27年、広島、長崎の被爆者の方たちの手記を朗読してまいりました。今年は、東日本大震災の体験をした私たちとしては、広島、長崎の惨状と東

日本とくに福島原発の惨状がオーバーラップして、身近なものとして感じられました。

私たちはこの朗読を、若い方たちにとくに聞いていただきたいと思ひまして、学校

公演に力を入れております。今年も、東京そして北海道と何カ所かいたしました。終演後、生徒さんたちが、たくさんの感想文を送っていただきました。その感想文の中に最も共通して同じように書かれていた感想文、それは今の自分たちは、本当に幸せだと思ふ。勉強ができること、両親がいること、食べ物や水があるということ。こんな当たり前のことがどれだけ素晴らしいか、気づかされました。これを機会に何事も感謝し、今の平和に感謝して、この平和を守っていくことが、自分たちの役目ではないか。というとても素晴らしい感想文を送っていただきました。

本当にこんな当たり前の幸せ、それがどんな素晴らしいか。私が大好きな詩人の一人である、私とほとんど同姓同名の高田敏子さん。22年前にお亡くなりになりましたけれども、とても可愛がっていただきました。高田さんの詩にこういう詩がございます。



手記、詩を朗読する高田敏江さん



「しあわせ」

歩きはじめたばかりの坊やは 歩くことでしあわせ

歌を覚えたての子どもは うたうことでしあわせ

ミシンを習いたての娘は ミシンをまわすだけでしあわせ

そんな身近なしあわせを 忘れがちなおとなたち

でも心の傷を なおしてくれるのは

これら小さな 小さなしあわせ

高田敏子 「しあわせ」

日本文藝家協会 許諾番号164251

どうもありがとうございました。 (拍手)

高田敏江さん プロフィール

群馬県前橋市ご出身。日本社会事業大学中退後、1954年に東映からデビュー。その後、劇団民藝に入団。1971年以後はフリーとして映画、テレビ、舞台で活躍。主な出演作品として、映画では「おふくろ」「神坂四郎の犯罪」「男は辛いよ寅次郎」「釣りバカ日誌」など多数。テレビでは「私は貝になりたい」「アフタヌーンショー司会」「チャコちゃんシリーズ」「池中玄太80キロ」「金八先生」など多数。また舞台では「幽霊屋敷」「夜明け前」「想い出のチェホフ」「ママの貯金」「この子たちの夏1945ヒロシマ」「夢千代日記」など多数。

高田敏江さんは特に平和の大切さを訴えるため「この子たちの夏1945ヒロシマ」を23年間続けるが、その制作母体である「地人会」が2007年に解散。その後女優18人で新たに「夏の会」を結成し、「夏の雲は忘れない」の全国公演を続ける。

歌 「心の歌のコンサート」

歌手 クミコさん



こんにちは、クミコでございます。

今、あの非常に私の略歴が自分でもびっくりする程丁寧に、読んでいただきまして、そんなに大したことしていないのに、ちょっと恐縮してしまいました。

本当に大したことはしておりません。大学卒業後、銀巴里というところに入り、そしてその後にこういうふうに歌を歌い始めた。言ってしまうえば、たったのそれだけでございまして、さっぱりとした人生でございますけれども、歌たちとは色んな出会いがございました。

一昨年、私のもとにやってきた「INORI～祈り～」という曲。これが本当何て言うんですか、その前から命の歌というのをやっていたけれども、この「INORI～祈り～」あたりからますます、命の大切さというのを裏を返せば、命の儚さですよね。そういったこと、あと、時代との関わりが段々深くなって来たような気がします。

高田さんが先程朗読されました、原爆の被害の子どもたち、そしてたましいたちのお話。この「INORI～祈り～」も全くそうでございます。佐々木禎子ちゃん、平和記念公園に建ってます原爆の子の像のモ

デルですね。禎子ちゃんの甥御さんに当たられる祐滋さんという、まだ私が会った時は30代の青年でした。

彼が、彼女の気持ちを代弁して作った歌を私のところに持ち込まれました。私は自分が被爆地に育っておりませんし、ご縁もないので、とても無理だと思いましたが、彼が言った言葉、「僕の体の中にも被爆二世の血が流れています。最近結婚しましたけれども、子どもを産むことに関しては何か不安を持っています」と。そのような言葉に、何かとても遠かったものが、ものすごく近いというふうに思いまして、私の力のできることはさせていただきましょうということから、「INORI～祈り～」を歌い始めました。

今も、ずっと歌っています。震災の後はまだ違った「INORI～祈り～」になってきたようなそんな気がいたします。

最初の曲です。

「INORI～祈り～」

「I N O R I ～祈り～」

別れがくると知っていたけど 本当の気持ち言えなかった
色とりどりの折り鶴たちに こっそり話しかけていました
愛する人たちのやさしさ 見るものすべて愛しかった
もう少しだけでいいから 皆のそばにいさせて下さい

泣いて泣いて泣き疲れて 怖くて怖くて震えてた
祈り祈り祈り続けて 生きたいと思う毎日でした

折り鶴を一羽折るたび 辛さがこみ上げてきました
だけど千羽に届けば 暖かい家にまた戻れる
願いは必ずかなうと 信じて折り続けました。
だけど涙が止まらない 近づく別れを肌で感じていたから

泣いて泣いて泣き疲れて 折り鶴にいつも励まされて
祈り祈り祈り続けて 夢をつなげた毎日でした

別れがきたと感じます だから最後に伝えたい
本当に本当にありがとう 私はずっと幸せでした

泣いて泣いて泣き疲れて 折り鶴にいつも励まされて
祈り祈り祈り続けて 夢をつなげた毎日でした

めぐりめぐり行く季節をこえて 今でも今でも祈ってる
二度と二度と辛い思いは 誰にもしてほしくはない
誰にもしてほしくはない

「I N O R I ～祈り～」 作詞 GOD BREATH 作曲 佐々木祐滋

日本音楽著作権協会（出）許諾第 1212637-201 号

... ..

最後の歌詞にもあるように、禎子ちゃん ですね、してほしくないというふうに思っ
はこのような思いを二度とほかの方、人類 ていたんですけれども、3. 11のあと、

あの福島ではあのようなことになってしま
いまして、今でもまだ収束の見通しも立た
ぬまま、子どもたちは危機にずっとさらさ
れ続けている。もちろん大人もですけれど
も、子どもたちの不安というのは測り知れ
ないものがあるというふうに思います。

禎子ちゃんと同じような、2歳で被爆し
て12歳で亡くなっている禎子ちゃんです
けれども、12歳の子どもたちは今、非常
に大変な思いの中で暮らしています。

こんなことが何で繰り返されてしまった
のか、考えても考えても悔しいばかりで、
ただ言えることは、もうしょうがない。う
しろを振り返る訳にはいきませんから前だ
け見て、今やれることをとにかくしていこ
う。そんな気持ちで私もやれることを全部
やっていこうとそんな思いでいっぱいでご
ざいます。

もう一曲、この原爆と非常に近い歌と
言うか、まさしく8月6日のことを歌った
歌でございます。

松山善三さんの詞です。「一本の鉛筆」と
いう、1974年の第1回広島平和音楽祭
で、その時、その当時でも大スターでした
美空ひばりさんが初めてこの歌を、こうい
った反戦の歌をオリジナル曲として発表さ
れました。

当時は、何であの美空ひばりが、この広
島の歌をとということで、非難というものが
あったと聞いています。いつの時代にもそ
ういったことがあります。でも、彼女自身
は、彼女自身が戦争を経験しているという
こともありますから、その人生の中の好き
な5曲の中の1曲とも聞いています。最後
まで、この歌を歌う時には涙を流して歌っ
ていたという話も聞きました。

「一本の鉛筆」を聞いてください。

「一本の鉛筆」

あなたに聞いてもらいたい あなたに読んでもらいたい
あなたに歌ってもらいたい あなたに信じてもらいたい

一本の鉛筆があれば 私はあなたへの愛を書く
一本の鉛筆があれば 戦争はいやだと私は書く

あなたに愛をおくりたい あなたに夢をおくりたい
あなたに春をおくりたい あなたに世界をおくりたい

一枚のザラ紙があれば 私は子供が欲しいと書く
一枚のザラ紙があれば あなたをかえしてと私は書く

一本の鉛筆があれば 八月六日の朝と書く
一本の鉛筆があれば 人間のいのちと私は書く

「一本の鉛筆」 作詞 松山善三 作曲 佐藤勝
日本音楽著作権協会（出）許諾第 1212637-201 号

… … … … … … … …

先程、あの、ご紹介にもありましたけれども、3月11日に私は石巻におりました。生まれて初めて行く石巻でした。仙台まではちょくちょくコンサートで何うこともあったんですが、その先というのは、私の人生にとって初めてで、地図を見ては、ため息を行く前についておりました。結構遠いなあというふうに思った訳ですね。私の中では新幹線の次の駅かななんて思っていたのが、全然誤りで、仙石線という電車線を通り、そしてまあ、車に乗って1時間あまりかかり、ずっと海岸線を右に曲がって行く、そんなところでした。ちょうど行く前、2、3日前に地震がありました。いやーな気はしました。ただ地震学者の方が、これは大地震の前兆ではないとはっきり言いました。はっきり言えば言う程心配になり、何だかいやな予感がしたんです。私は靈感も何もない人間なのに、予知能力もない人間なんですけれど、その時だけはすごくいやな気持ちがずーと続いておりました、いやな夢をずーと見ておりました。そして、うちの父とか母に地方に行く時は、必ず明日はどこどこへ行くよというようなことを言って出かけるのが常の習わしだったんですが、その時は何故か言うてはいけないもののような気がして、一言も言わずに出か

けました。ですから私が、その地震に遭った時、うちの父も母も、自分があの映像の



石巻の、大変な映像のところ、あの津波に襲われているところに、自分の娘がいるとは思わなかったんですね。ですから、言わなかったこと、それは非常に良かったのかなと、後になって思いました。もしその時、私がそこにいると分かったら、高齢でもありますし、心臓も良くないこともありますから、ちょっとその安否が分かるまでの間に、あの父とか母の方がやられちゃったんじゃないかというふうに思いますと、あの言わない方が自分の判断としては良かったのかなあと、後になって思いました。

当日、3時からリハーサルが行われると

ということで、石巻市民会館というところの地下の楽屋におりました。その市民会館は築40何年経っているという、昭和40年代の建物で、そこに入る前に、宮城生協の主催だったんですけど、そのスタッフの方が、「クミコさん、ここはクミコさんのコンサートを最後に建て壊すそうです。光栄なことですね。」なんて言う会話をして入った訳でございますから、2時46分に左から右に、ごーという轟音とともに、あれっ、ここって地下鉄が通っていたっけという思いと、右にいたうちの男の子のスタッフが、「地震です」という叫びとガッ、ガッ、ガッ、ガッ、ガッ、ガッ、ガッという地震がほとんど同時にやってきました。そして、その右側にいた男の子は図体も非常にでっかい男の子だったので、楽屋入り口の梁につかまったんですね。で、私がその後ろに背中をしっかりつかまり、後ろを見ましたら、うちの社長が私につかまって、だんご三兄弟のような感じでおりました。

その時、頭をかすめるというか、頭の中を占めるのは、二つのことで、一つはとにかくこの築40何年というこの建物がペシャンコにならないでほしい。それだけです。でも、そういう時に頭の中のイメージというのは、ちょっと前にありましたニュージーランドの地震。いっきにペシャンコになってしまったあの素晴らしい近代的なビル、その映像が浮かぶんですね。ですから、私はつかまりながら、ずーと見ていたのは忘れもしません、壁です。壁が古い建物らしく、ブロックが重なっているのが何となく、こう分かるような造りになっているんですが、その一つの石を見て、どれかが、おそらくこれがピリッとはずれたら、あのヒビ

が入って、そこがポロツとなったら、全部がきつとってしまうと素人ながらそんなことを考えたので、その壁をずっと見て、お願いだからどの1個も飛び出させないように願っておりました。

そして、もう一つ願っていたのは、お願いだからこの様子の分からない地下で、電気が消えたらもう逃げられないから、電気よ消えないでくれ、電気よ消えないでくれと願っておりました。すーと小さくなる電気なんですね、それが段々と。そうしましたら、途中で、自家発電、非常灯に切り替わりましたので、うすぼんやりと光が残りました。そのお陰で、とりあえず地震が収まった時に私たちは表に出ることができました。表の光を見た時に助かったと本当に思いました。

それから後、ああいった津波が来るなんてことは、その時点で、おそらく被災地の誰も、誰一人として、あんなひどい津波が来るとは思っていなかったと思います。サイレンは鳴りました。津波警報が出ました、一刻も早く高いところに逃げてくださいという警報でしたけれども、周りを見渡しても海も見えないし、どうしてここに津波が来るのか全く皆目分かりません。そんなふうにウロウロしている時に会館の方がとりあえず、この裏山に登ってくださいと。幸いなことに裏に山がありましたので、そこを登りました。その後に行きました時に、どうしてここを登れたのかなあと思うようなところを。そういう時は不思議ですね、人間の力というのは。ヒョイ、ヒョイ、ヒョイと登って行ってしまったんですね。そして途中まで来ましたその時はもう、それまで暗かった空から、ものすごく雪が降

ってまいりまして、ダウンジャケットの頭かぶっていても、その上に雪が降り積もってくるという非常に寒くなって、視界がものすごく悪くなっておりました。

誰かが、水が来てるって叫んだんですね。で、えっ、まさかと思って振り向きますと、本当に、その雪で視界が悪い中で、さっきまでいた駐車場あたりがぼんやりと見えるんですが、そこで何台かの車が不思議な動きをしているのが見えました。グルグルグルと回っているような動きでした。それが水に浮いているという状態だった訳ですけども、何せ、初めてのことでですから、何だかこう全てが把握できない。翌朝になった時に、本当に晴れ渡った翌朝、素晴らしい日差しの中で、私たちが昨日いたところがほとんど川になってしまっているというところを見た時に、ことの重大さがようやく分かりました。

そこから二日間をかけて自分の住んでいるところに戻ってきました。私にはお風呂も入れるし、ご飯も待っているし、部屋は暖かいし、お布団も暖かいし、でも私たちがちょっと前までいたところの人たちは、まだあの寒さの中にいると思うと、それからの方が辛い毎日が続く、歌なんていうのは、おにぎりにも水にもかなわない無力感にとらわれました。それはおそらく私だけじゃなくて、ほとんどの音楽をやっている人たちが、あのしばらくの無力感っていうのは、今まで経験したことのないものだったと思います。

でも、そこから3ヶ月後に、また石巻へ行きコンサートをする。招かれて、イベントがあつて、私も招かれて、その一員として歌を歌う。その中で、石巻の方々はずご

く喜んでくださいました。本当に、歌っていうのはやっぱり何らかの役割があるんだなあつと逆に励まされて、その時点で、私のもう一回、歌い手としてのスタートになりました。廃業しかけていた訳ですから、本当に天の助けにも似た、本当にありがたいことでもございました。

その後、6ヶ月後には先程、湊小学校と言っていたいただきました。そこは避難所としても大きなところで、一時は1000人以上の方が教室に避難をされている。そこでコンサートを、体育館でコンサートをしました。その時のメインは再生。津波に流されたピアノ、泥の中に沈んでしまったピアノを何とか再生させたいという楽器屋さんの社長さんの思いが通じたピアノ。その社長さんは何と82歳なんです。82歳で余命を全部かけて、30台流されたピアノを再生させるとおっしゃいました。私は、その泥に沈んだピアノを拝見した時に、どう考えても、これ無理じゃないかなあと。もちろん買った方が早いし、これはひどすぎるし、一時期ピアノの上に車まで乗っかってたようなものがある訳ですから。これはと思ったんですが、社長さんは120歳まで生きてがんばると言うんですね。ですから、私はもう嬉しくなっちゃって、できたら私、グランドピアノがいいんですけど、グランドピアノ再生していただいたら、歌いに来ちゃいますって。その約束が9月11日になった訳で、今でもそのピアノからは砂が出てまいります。外見は普通のピアノとほとんど同じですけども、時々音が妙なことになる、それを外すとサラサラサラと海の砂が下にたまるんですね。なかなかしぶといです。なかなかあいつらも

しぶといです。でも一歩近づいています。ピアノだって再生するんだから、人だって再生するし、街だって再生するよ、そんな気持ちで9月11日、歌い終えることができました。

その時にみなさん、その時は石巻の方々に、シャンソン愛好会の女性方、そして女子高生の方々にも一緒に舞台上がってもらって合唱をしたりいたしました。最後にこの歌を歌いました。一歩だけ前に進もうよ、一日一歩、三日で三歩、でも二歩下がっちゃう。あらってという感じですけど、でも、もっと現実には難しい。もしかしたら、10日かかって一歩あゆめないことも多いかも知れない。でも長い間を見れば、あっ、一歩だけ進んでるじゃない、二歩も進んでるじゃない、そういう日は必ず来る。そんなふうに思いたい、思える、そんな感じでございます。

私は11月11日に、きっとツナガルプロジェクトというものを立ち上げました。昨日ちょっと会見をしたんですけども、それはネットを通じて募金をしていただくという試みでございます。これまで募金箱を手になんな場所に行きまして、みなさまの暖かい志をいただき、それを地元へ届けてまいりましたが、あの、段々と人間は忘れていくものでございます。そんな時にネットで何とかしていかなくちやいけないんじゃないかということで、きっとツナガル募金というのを立ち上げました。

そこを覗いていただいて、11月11日以降に私のサイトから入っていただいても構わないです。クミコ、カタカナで検索してもらって、そこから来ていただくと、本当にちょっとずつでも、長いスパンでやっ

ていこうと思っておりますので。そんなお金が集まればいいなというふうに思っています。その募金で福島の子どもたち、そして石巻の子どもたち、もっともっと集まれば、もちろん被災地にたくさん配りたいけど、なかなかそれも難しいので、とりあえず石巻と福島のおびえている子どもたちのために使わせていただこうと、そんなふうに思っています。ご協力いただきたいというふうに本当に思っています。お力を貸してほしいんです。11月11日以降、本当によろしければ、私のサイトをどうか覗いていただければというふうに思っています。

では、最後の歌になります。一歩だけ前に進も。

「最後の恋～哀しみのソレアード～」です。



歌とトークのクミコさん

「最後の恋～哀しみのソレアード～」

最後の恋に生きる　白い傘を開いて
一歩だけ前が出る　輝く命のため

最後の恋に生きる　あなたの長い指が
抱きよせるわたしの肩　ふるえる真昼のキス

『 誰にも言わないし　誰に背中を押してもらわなくてもいい
だからわたしは言うの　わたしの命に…
悔いることをおそれてはいけない　絶望をおそれる者に
しあわせはおとずれない 』

人生ってステキだと　ふたりなら思えるわ
すぎた日々風のように　哀しみも遠ざかる

人生って不安だと　あなたも思うかしら
大丈夫怖くはない　長い影ひとつになる

『 引き返すなら今だわ　友達もバカねと笑った
でもやめない　わたしの人生だもの
わたしが決めた恋だもの　人はみないつかは終わる
だからこそあなたが欲しい 』

最後の恋に賭ける　負けるなとささやく声
おそれずに一歩だけ　輝く命のため

おそれずに一歩だけ　輝く命のため

SOLEADO

Music by Zacar and Dario Baldan

Words by Francesco Specchia, Maurizio Seymandi and Alberto Salemo

©1974 EDIZIONI MUSICALI BELRIVER S.R.L.

Permission granted by EMI Music Publishing Japan Ltd.

Authorized for sale only in Japan

日本語詞　大石静　日本音楽著作権協会（出）許諾第 1212637-201 号

ありがとうございました。（拍手）

クミコさん プロフィール

1954年茨城県水戸市のお生まれ。早稲田大学をご卒業後、1982年シャンソニエの老舗・銀座「銀巴里」のオーディションに合格し、プロとしてスタート。その後は渋谷「ジャンジャン」などにも出演し、シャンソンの枠にとどまらず、ジャンルを問わない唄い手として活躍。

2000年にアルバム「AURA アウラ」。2002年にはニューアルバム「愛の讃歌」をリリースし、シングルカット版では異例の大ヒットとなる。2004年「わたしは青空」、2006年「クミコ・ベストわが麗しき恋物語」、2007年デビュー25周年記念アルバム「十年～70年代の歌たち～」をリリース。その後も2008年ニューアルバム「友よ」、2009年「届かなかったラブレター」、2010年ニューシングル「INORI～祈り～」をリリース。この「INORI～祈り～」でNHK紅白歌合戦に初出場。

クミコさんは、2011年3月11日の東日本大震災では公演で訪れていた石巻市で被災。その後、石巻市で「心の復興コンサート」を開催するなど、被災地への支援も続ける。

非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）3月7日

宝 塚 市



宝塚市平和モニュメント「火の鳥」



いま、語りつぐ 平和への願い VIII
平成24年(2012年)12月発行
編集・発行 宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課
〒665-8665 宝塚市東洋町1-1 電話 0797-71-1141 (代表)